東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

A Comparative Study of Japanese and Chinese Junior High School Students on the Cultural Characteristics of Conflict among Friends

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-09-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 山本, 登志哉, 姜, 英敏, 呉, 宣児
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174402

友人間葛藤の文化的特徴に関する日中中学生の比較研究

A Comparative Study of Japanese and Chinese Junior High School Students on the Cultural Characteristics of Conflict among Friends

山本登志哉（発達支援研究所）
Yamamoto TOSHIYA（Developmental Research Support Center）
姜英敏（北京師範大学）
Jiang YINGMIN（Beijing Normal University）
呉宣児（共愛学園前橋国際大学）
Oh SUNAH（Kyoai Gakuen University）

＜要約＞
人は友人間に生まれた葛藤情況をどのようにイメージし，それに対してどのように調整を図ろうとするのだろうか。そのあり方に個人差を超えた文化差が見いだされるだろうか。本研究では，日中の中学二年生に「友人に頼みごとをしたが断られた」という内容を持つ物語を自由に作成してもらい，そこに示された葛藤の内容やそれへの対処の仕方，その後の両者の関係の変化を分析した。分析では物語の量的分析による比較と，典型事例に見られた構造の差に関する質的比較を行い，日本に比べ，中国の中学2年生は深刻な葛藤を描くものが多く，登場人物間の関係など背景文脈も複雑で，その展開も劇的な物語を作成する傾向が著しいことが明らかになった。以上の結果を踏まえ，日中韓の異なる文化的背景を持つ著者が，それぞれそこからどのような文化的意味を読み解けるかについて，解釈を試みた。各解釈者に共通するのは，日本では葛藤を両者の間で明示的に論じ合うことを避けて，相手の気持ちをおもんぱかって自己内部で解決しようとする傾向があり，中国は重い葛藤を両者のぶつかり合いの中で解決しようとする傾向があるという点であった。

＊キーワード：中学生　友人　葛藤　物語　日中文化比較

1. 研究の目的と問題の所在

人は様々な葛藤に出会いながら，それを調整して生きている。どのような葛藤に出会い，それにどのように対処しようとするかはその人が置かれた人的・物的な環境条件によっても，その人の個性によっても異なる。そしてそれは個人によって異なるだけではなく，異なる文化社会に生きる者の間でも異なった様相を示すように思われる。次の「あさん」と「びさん」，「敏康」と「軒宇」の間に生じた二つの葛藤場面の描き方の違いもそのような差異を表す例の一部である

あさんは放課後，体育大会のポスターをつくならければならなかったので，友達の**び**さんに手伝ってくれと頼みました。**び**さんはちょっと用事があるのでだめだと断ったので，**あ**さんは，塾か部活か何かと尋ねました。**び**さんは，部活があると答えたのですが，**あ**さんが放課後遅くまでかかってポスターを作り，帰るとき，**び**さんの部活はまだやっていたが，そこには**び**さんの姿がありませんでした。次の朝，**あ**さんは**び**さんに，昨日本当に部活へ行ったのと尋ねたところ，家の用事があって行かなかったと答えました。結局**び**さんは**あ**さんに嘘をついて手伝うのを断ったのです。**あ**さんは，嘘をつかれて裏切られたような気がしました。しかし，よく考えてみたら自分の仕事を人に手伝ってもらおうとする甘い考えが悪かったのだと反省しました。それに本当に家で何かあったのかもしれません。**あ**さんと**び**さんは，その後もいつも通り仲良くしました。めでたしめでたし。（JJ1，深刻度軽，関係維持）

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

敏康と**軒宇**は仲のいい友人で，義兄弟の契りを結んでいた。二人はそれぞれ同じような現代的産業の有名な会社を作っており，つまりは生活の上では友人，仕事の上では競争相手だった。ある日，**軒宇**の会社の，海外から輸入される重要な部品が外国の大企業に独占され，経営がなりゆかなくなった。それで**軒宇**は義兄弟の**敏康**の所に行って関連部品を借りて，5% の利息で償還することとした。ところが**敏康**はその取引を断った。**軒宇**の会社が破産すれば，国内の競争相手がひとつ減り，張り合える企業が一つ消えることを望んでいたからだった。そののち**軒宇**は別の会社に助けを求め，ほかの人から助けられて会社の資金連鎖は再び回るようになった。彼は**敏康**に必ず血の償いをさせることを誓い，**敏康**は得をしようとしてかえって損をすることになって後悔した。その後彼らは別々の道を進み，お互いの気持ちは零下にまで冷え込んだ。（CJ8，深刻度重，関係悪化）

では問題を友人間に生じる葛藤に絞ってみた場合，人々はどのような葛藤に出会い，どのようにそれを解決しようとするのだろうか。そしてそのような葛藤の展開について，個人差を超えた文化差を見出すことは可能なのだろうか。

本研究では日中の中学 2 年生を調査協力者とし，生活のなかに生ずる葛藤について，彼らがどんな場面を意識し，その場合の解決法とそれによる関係変化について，想像で架空の物語を作成してもらうことによって検討する。

なお，本研究は以下のような先行研究の流れを背景に持つ。まず第一に，映画によって提示される物語の様々な場面について抱く感想，理解を異なる文化社会に育ったもの同士で交流し，お互いの理解の個人差を超えたズレを発見し，その意味を対話的に理解することを目指した，「円卓シネマ」と呼ばれる実践研究がある（山本・

伊藤 2005，伊藤・山本 2011，山本・姜 2011，呉・崔・山本 2014）。

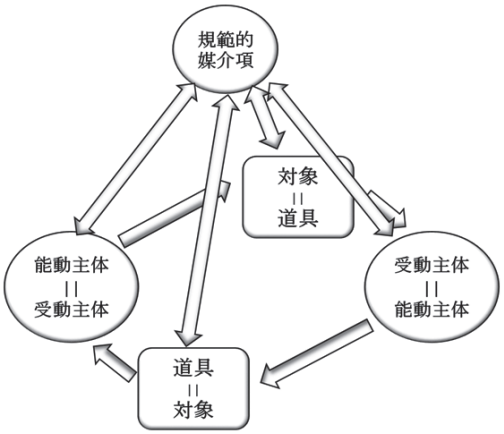
第二に，「友達のチョコレートを無断で食べた」といった場面をどう理解するか，ということについて日中韓の小学生がお互いに意見を交換し，相互の共通性や差異を対話的に理解する「『異己』理解共同授業プロジェクト」と名付けられた授業実践の蓄積がある（姜・王・草野 2009：釜田・姜 2014：釜田・堀之内・周 2020）。同様に日中の高校生や大学生・大学院生同士の対話的異文化理解相互理解の多様な方法による試みやその理論的な意義の整理に関する一連の研究が行われてきた（Oh，2017；Pian，2017；Sakakibara，2017；Tajima, 2017, 2021：Watanabe, 2017 他）

第三に，お小遣いについての子どもと友人，大人の考え方や実際の使い方などの分析を通して，そこに見られる規範的意識の，日中韓越各地域の間の文化差や発達のありかたを検討した文化発達心理学的共同研究がある（高橋・山本 2016，英訳版 2020；Takahashi，Yamamoto, Takeo, Oh, Pian, & Sato, 2016 他）。

第四に，文化差や年齢差，社会的立場の差などに関連して見いだされる，規範的な意識や他者理解の仕方のズレに注目してコミュニケーションとその調整過程を，一般的に理解する理論枠を模索する研究として，EMS（拡張された媒介構造：図 1）概念を用いたディスコミュニケーション分析の共同研究があり（山本・高木 2011，山本・石塚 2019 他），さらにこの視点が文化に関する心理学に応用されることで「差の文化心理学」という新たな議論や，文化が持つ実体性と非実体性，主観性と客観性，個人性と集団性といった二項対立的な性格を統一的に理解しようとする方法論的研究がある（山本 2013，2015 他）。

これらの研究は，教育・心理・法といった複数領域にわたっているが，異質さを抱えた者同士のコミュニケーション上の葛藤状態の緩和を模索している点で共通しており，さらにこれらを背景としながら，発達障がい者と定型発達者の間に生ずる困難を，それぞれの特性の「異質さ」を抱えたもの同士のコミュニケーションのズレを原因とするものとして位置づけ，それを対話的に理解しあい，関係調整を図る逆 SST といった新しい実践的試みも生まれている（渡辺 2021，渡辺・大内 2021）。

図 1　EMS　拡張された媒介構造



本研究では中学生の作成した物語に見られる文化的な性格の差を比較的素朴な量的分析によって表現するとともに，その典型例について物語構造の差を示し，それらの差に表れる「文化的な葛藤理解・対処法の意味の差」について，日中韓の研究者がそれぞれに解釈を述べる形で分析を進める。

このように文化差がもつ意味を単一の「客観的」視点からモノロジカルに解釈するのではなく，異なる文化背景を持つ研究者間の対話の中からポリフォニックに浮かび上がらせる文化比較の方法論は山本（2015，第 9 章：2016, p. 268–）に依拠する。

なお，本研究で用いた物語作成による文化比較研究の手法は片成男によって，日中の道徳性発達を比較するために開発されたもので，道徳性の発達をコールバーグ流に何らかの基準に到

達したかどうかで考える視点からではなく，相互的な関係調整の展開として考える視点を持つ（片 2002）。このように，ある逸脱行為や葛藤の展開を個々の主体内部の認知的状態としてではなく，主体間の関係の問題としてダイナミックに読み解く議論は，個人を絶対的な責任主体として考える議論に対して中動態論を提起した國分らの議論（國分 2017；國分・熊谷 2020）とも通じ，その手法は動的葛藤調整過程の特徴として文化性を考える（山本 2015）本研究に適したものとして採用された。

2. 研究の方法と結果

【1】調査内容

日中の中学 2 年生を協力者とし，担任教師を通して各国語の問題用紙を配布し，以下の要領で自由に記述してもらう。

> 友達の間でこまったことがおこるのはどんなときでしょうか。そのときどんなことがおこるでしょうか。たとえばこんな場合を考えてみましょう。
>
> 【A さんと B さんはお友達です。ある日，A さんが B さんに，何か「手助け」をしてほしいことがありました。けれども，B さんはなにかの理由で「手助け」をしませんでした。】
>
> さて，このような物語のあらすじを見て，あなたはどんな場面を想像しますか？　このあらすじをもとに，自由に物語を想像して作ってみてください。物語には正解や不正解はありません。あらすじに沿って素直に想像したことを書いてください。作っていただいた物語が誰のものかを特定することもありませんので安心してください。物語を作るときには，以下の点については必ず書くようにしてください。
>
> 1. A と B にそれぞれ仮名を付け，作文ではその名前を使って下さい。2. A さんはどういう「手助け」をしてほしかったのでしょうか。3. B さんはどうして「手助け」をしなかったのでしょうか。4. B さんが手助けをしなかったあと，A さんと B さんはそれぞれどうしたのでしょうか。5. 最後に A さんと B さんの関係はどうなったのでしょうか。6. 最後にこの物語に自由に題名を付けてください。

【2】実施時期と調査地域・協力者

日本　本州の国立大学付属中学　2021 年 3 月実施
帰宅後にネットを通じて日本語で回答。
回答者 44 名。
但し JJ38 は要件を満たさなかったので除外する。

中国　寧波省の国際中学　2021 年 2 月実施
校内で昼食休憩時に漢語で回答。回答者 15 名。

【3】分析と結果

得られた物語を一読して，三か国の研究者が共通して持った素朴な印象は，日本の物語に比べて中国の物語は深刻な内容で，展開も劇的なものが多いということであった。これらの印象

図 2　物語文字数

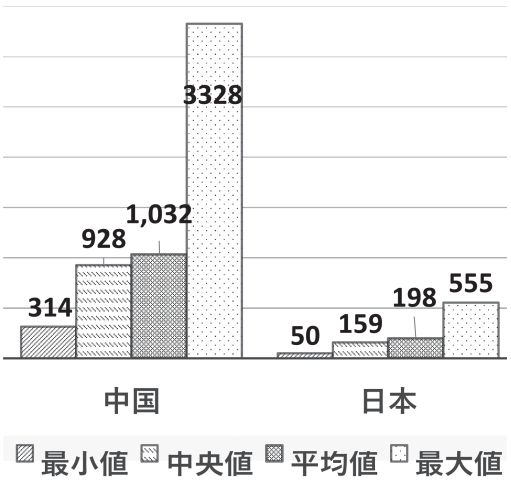


表 1　援助要請に関する直接のやりとりの経過

被験者	日本	ターン数
JJ1	①D1→②Rw1→①ER2→②E2→①ER3→②E3→①iU4	7
JJ2	①D1→②Rw1→①U1	3
JJ3	①D1→②Rw1→①G1→②C	4
JJ4	①D1→②R1→①ER1→②E1→①D1→②Rw1→①D1→②R→①■	9
JJ5	①D1→②Rw1→②OC2→①U1	4
JJ6	①D1→②R1→①Ui2	3
JJ7	①D1→②Rw1→②OC2→①D1→①②H1	5
JJ8	①D1→②R1	2
JJ9	①D1→②Rw1→①OC2→②U2→①H2	5
JJ10	①D1→②R1	2
JJ11	①D1→②R1	2
JJ12	①D1→②Rw1→①U1→②C	4
JJ13	①D1→②Rw1→①②H1	3
JJ14	①D1→②O	2
JJ15	①D1→②Rw1	2
JJ16	①D1→②R1	2
JJ17	①D1→②Rw1	2
JJ18	①Di1→②O→②E1①U1	4
JJ19	①D1→②Rw1→D1→②R1	4
JJ20	①Df1→②R1→①ER1	3
JJ21	①D1→②R1	2
JJ22	①D1→②R1→②C1	3
JJ23	①D1→②R1→②E1→①U1	4
JJ24	①D1→②O	2
JJ25	①D1→②Rw1	2
JJ26	①D1→②R1	2
JJ27	①D1→②R1→①ER1→②E1→①U1→②C1	6
JJ28	①D1→②RW1	2
JJ29	①D1→②Rw1→①②H1	3
JJ30	①D1→②R1→C	3
JJ31	①D1→②R1	2
JJ32	①D1→②Rw1	2
JJ33	①D1→②Rw1	2
JJ34	①D1→②R1	2
JJ35	①D1→②R1	2

被験者	日本（左列から続く）	ターン数
JJ36	①D1→②R1	2
JJ37	①D1→②R1→①D2→②R2→①B2→②R2→①A2	7
JJ39	①D1→②Rw1	2
JJ40	①D1→②Rw1	2
JJ41	①D1→②Rw1→①U1	3
JJ42	①D1→②Rw1→②CO1	3
JJ43	①D1→②Rw1→①A1→②1	4
JJ44	①D1→②Rw1→①U1	3

記号凡例	
行為者	①：援助要請者　②：拒絶者
行為	R：reject 拒否　O：overlook 気づかず　E：explanation 説明　FE：fake explanation 嘘の説明　ER：explanation request 説明要求　D：demanding 要求　B：blame 非難　C：compensation 補償行為　A：attack 攻撃　G：give up 断念　TR：try to repare 修復　S：sorry 謝る　U：understand 理解・受容　OC：offer a counterpropozal 対策の呈示　H：Help 援助
様態	w：with reason 説明付き　f：fake 嘘 i：implicitly 非明示的

被験者	中国	ターン数
CJ1	①Dw1→②ER1→①E1→①D1→②OC2→②Rw1	6
CJ2	①Di1→②B1	2
CJ3	①D1→②R1→B1→②TR1	4
CJ4	①D1→②Rw1→②OC2→①Dw1→Rw1	5
CJ5	①Di1→②O1→①U1	3
CJ6	①D1→②Rf1→①ER1→②E1	4
CJ7	①D1→②Rw1→①A1	3
CJ8	①D1→②Rw1→①A1	3
CJ9	①D1→②Ri1→①E1	3
CJ10	①D1→②Rw1→①U1→②D2	4
CJ11	①D1→②R1→①ER1→②E1→①U1→①S1→②U1	7
CJ12	①D1→②R1→①B1→②B1→①Bi1→②C1	6
CJ13	①D1→②Rw1→①Si1→②E1→②S1→②C1	6
CJ14	①D1→②R1→①ER1→②E1	4
CJ15	①D1→②Ri1	2

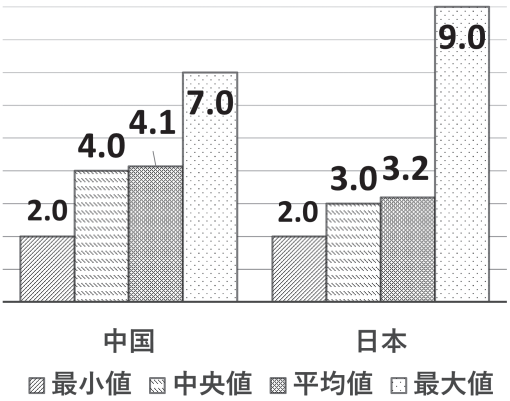
記号の意味の例示

①aD1→②R1→①ER1→②E1→①U1→②C1（JJ27）
A（援助要請者）が要求 1 を行い，B（被要請者）が拒絶。A がその理由を問い，B が説明すると，A は理解をし，B は補償的な行動を行う。

①Df1→②R1→①ER1（JJ20）
A が嘘の要求 1 を行い，B が拒むと A は説明を求める。

①Di1→②O1→①U1（CJ5）
A が明示せずに 1 を期待していたが，B は気づかず，A はそのことを理解する。

図 3　要請～直接結果のやりとりターン数



は作成された物語のどのような点に表されているかについて，まずは素朴な数量的比較を行ってみる。

なお以下の分析では，漢語を山本が日本語に訳し，日本語ができる姜のチェックを受けたものをデータとして用いる。

1）作成された物語の文字数比較

作成された物語の文字数について，最大値・最小値・中央値・平均値を図 2 に示す。一見してわかるように中国の生徒は学校で比較的短時間に書いたにもかかわらず，自宅で書いた日本の生徒よりはるかに長い物語を書いている（$p<.001$：分散分析）。

2）A と B のやりとり内容の分類とターン数の比較

A の援助要請からその要請に関する直接的なやりとりがいったん終結するまでに交わされた行為について，表 1 の記号凡例に示された分類でその流れを記号化するとともに，そのターン数を比較したところ，日中間で大きな差は見られなかった（図 3）。即ち，中国では直接のやりとり以外の要素が多く書かれていることになる。

中国の生徒が長い物語を作成する理由として，

表 2　依頼前文字数と全体の中の比率（%）

日本						中国		
被験者	文字数	比率	被験者	文字数	比率	被験者	文字数	比率
JJ1	34	8.6	JJ23	76	13.7	CJ1	1,726	51.9
JJ2	4	2.3	JJ24	28	13.1	CJ2	1,020	73.7
JJ3	0	0.0	JJ25	0	0.0	CJ3	279	40.7
JJ4	22	5.9	JJ26	0	0.0	CJ4	15	4.8
JJ5	0	0.0	JJ27	66	16.5	CJ5	557	51.7
JJ6	194	58.4	JJ28	50	27.3	CJ6	85	13.7
JJ7	27	9.7	JJ29	19	17.3	CJ7	459	49.5
JJ8	0	0.0	JJ30	180	37.3	CJ8	135	35.6
JJ9	74	20.2	JJ31	23	21.9	CJ9	363	57.3
JJ10	0	0.0	JJ32	26	27.1	CJ10	404	41.7
JJ11	0	0.0	JJ33	0	0.0	CJ11	192	36.8
JJ12	0	0.0	JJ34	0	0.0	CJ12	902	57.8
JJ13	0	0.0	JJ35	0	0.0	CJ13	171	32.8
JJ14	0	0.0	JJ36	4	2.9	CJ14	619	59.9
JJ15	76	27.3	JJ37	10	2.8	CJ15	470	30.7
JJ16	0	0.0	JJ39	0	0.0			
JJ17	0	0.0	JJ40	45	24.1			
JJ18	24	9.5	JJ41	30	10.7			
JJ19	7	2.9	JJ42	0	0.0			
JJ20	21	7.2	JJ43	0	0.0			
JJ21	0	0.0	JJ44	0	0.0			
JJ22	0	0.0						

図 4　文冒頭で文脈設定に費やす文字数比率の分布

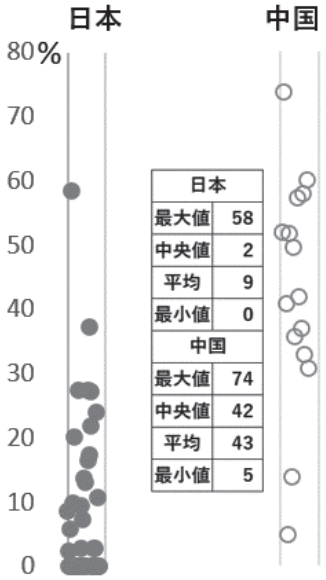
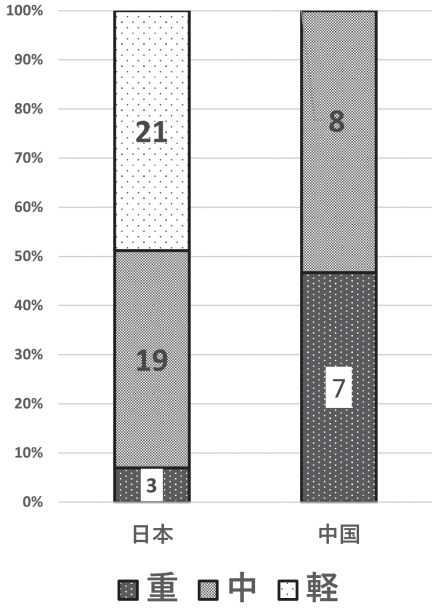


図 5　物語の深刻度比較



A や B の行為の背景となる文脈を丁寧に描こうとする姿勢が見て取れる。この点は A の援助要請が書かれる以前に背景文脈がどの程度の文字数や割合を用いて描かれているかによっても確認できる。

表 2 は各被験者ごとの依頼前の描写文字数と，それが物語の中で占める比率を示したものである。一見して中国の生徒の物語は多くの文字数と割合を割いて冒頭部分を丁寧に書いていることがわかる。

これは前提文脈をまず厚く書こうとしている姿勢が反映されていることが具体的な物語を見ると確認できるが，ここでは文字数比率の分布を図 4 に示す。

日本でも冒頭部分に 58% の文字数を費やす例もあるが，中央値や平均値を見てもその差は歴然としている。なお，日本と中国のそれぞれのプロットエリアに横幅があるが，これは単に分布の見やすさのためでそれ以外の意味はない。

3）物語の深刻度の比較

中国の物語の特徴として感じられるのは物語が劇的な展開を示すものが多いことだが，その点を確認するために，物語に含まれる最も深刻な内容を次の基準で三段階に分類した。

軽：日常的出来事で調整が簡単にできる程度。その結果も深刻さがない。中：結果が比較的大きな個人的不利益につながる。重：刑事罰レベルの逸脱や生命にも係わる。

分類は山本が行い，姜がその妥当性をチェックした。特に意見の相違はなかったため，山本の分類で示した結果が図 5 である。一見して中国では重い内容が多く，軽い話は全く見られないことがわかる（図 5．$p<.001$：カイ二乗検定）。比べて日本の方は基本的に軽い葛藤の物語が中心である。

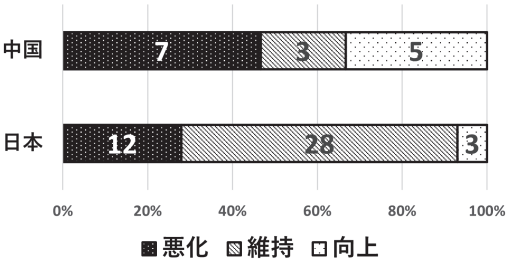
具体的にはどのような葛藤内容が描かれているかを，その重大さの評定と共に被験者ごとに表 4 に示す。

4）葛藤後の関係変化の比較

援助要請を断られるという葛藤の後，A と B の関係がどのように変化したかを悪化，維持，向上で分類し（表 4），その比率を比較すると図 6 のようになる。

各分類の比率は日中で明らかに異なった傾向

図 6　葛藤後の関係変化



を示し（p<.004：カイ二乗検定），日本では「維持」が大半を占める。すなわち，葛藤後も関係が悪くなる，という物語展開をあまり好んで描かないように見える。

日本では「向上」のデータ数が少なく，中国では「軽」が全くないため，統計的に差を示すには至らないが，参考までに物語の深刻度別に関係変化の様相を図 7 及び 8 に示す。日本ではたった 3 例しかない「重」のうち，2 例が関係向上に結び付けられているのが印象的である。

5）量的分析のまとめと物語構造の比較

以上ここまでの量的分析で見えてきたことをまとめると，以下のようになるだろう。

中国の中学生は友人間の葛藤場面として深刻な場面を想定することが多く，日本の中学生はかなり日常的な些細な場面を思い浮かべる（または表現する）ことが多い。またその後の関係変化を見ても中国では悪化と向上に二分化する傾向が見え，逆に日本は基本的に維持という物語が多くなる。

中国の物語が日本の物語より劇的な展開を示すように感じられる点は，ひとつには物語の長さにも単純に表れ，中国では相当長くなるものが多数である。しかしそれにとどまらず，実際の援助要請が始まるまでの状況の設定に費やす文章が多くの中国の物語で著しく長いことを見ると，物語の文脈設定の複雑さの違いがそこに現れている可能性がある。

そこで次に日中でそれぞれ最も深刻で劇的な展開を示していると思われる二つの物語（JJ37：356 文字と CJ1：1726 文字）を取り上げ，登場人物間の関係や主なやりとり内容を「人物相

表 4　物語の深刻度と各物語中で最も深刻な内容・関係変化の方向

日本								中国			
被験者	関係変化	深刻度	内容	被験者	関係変化	深刻度	内容	被験者	関係変化	深刻度	内容
JJ1	維持	軽	手伝いへの嘘	JJ23	向上	重	殺人	CJ1	悪化	重	殺人
JJ2	向上	軽	小説の題名決定	JJ24	維持	軽	日常手伝	CJ2	悪化	中	不正との闘い
JJ3	維持	軽	日常手伝	JJ25	維持	軽	日常手伝	CJ3	悪化	中	愛情告白
JJ4	維持	軽	日常貸借	JJ26	悪化	中	不正学習	CJ4	維持	中	不正学習
JJ5	維持	軽	日常手伝	JJ27	維持	軽	約束破る	CJ5	向上	中	競争支援
JJ6	維持	中	不正学習	JJ28	維持	軽	日常手伝	CJ6	向上	重	ひどいいじめ
JJ7	向上	重	自殺	JJ29	維持	中	学習援助	CJ7	悪化	重	殺人
JJ8	維持	中	事故	JJ30	維持	軽	日常貸借	CJ8	悪化	重	事業破綻
JJ9	維持	軽	ボランティア	JJ31	悪化	中	愛情告白	CJ9	向上	中	共演
JJ10	悪化	中	愛情告白	JJ32	維持	中	借金	CJ10	維持	重	殺人
JJ11	悪化	中	愛情告白	JJ33	悪化	中	不正学習	CJ11	向上	重	事故死
JJ12	維持	軽	原稿代筆	JJ34	悪化	中	無理な頼み	CJ12	維持	中	不正学習
JJ13	維持	軽	日常手伝	JJ35	維持	中	学習援助	CJ13	向上	中	共演
JJ14	悪化	軽	学習援助	JJ36	悪化	軽	日常手伝	CJ14	悪化	中	愛情告白
JJ15	維持	中	仕事手伝	JJ37	悪化	重	殺人	CJ15	悪化	重	同性愛
JJ16	維持	中	学習援助	JJ39	維持	軽	日常手伝				
JJ17	悪化	中	不正学習	JJ40	維持	軽	日常手伝				
JJ18	維持	軽	席を譲る	JJ41	維持	中	仕事手伝				
JJ19	維持	軽	日常貸借	JJ42	維持	中	学習援助				
JJ20	悪化	中	学習援助に嘘	JJ43	維持	軽	日常手伝				
JJ21	悪化	中	学習援助	JJ44	維持	軽	日常手伝				
JJ22	維持	中	学習援助								

図７　日本物語深刻度別関係変化

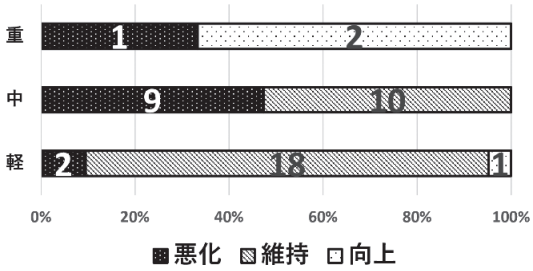


図８　中国物語深刻度別関係変化

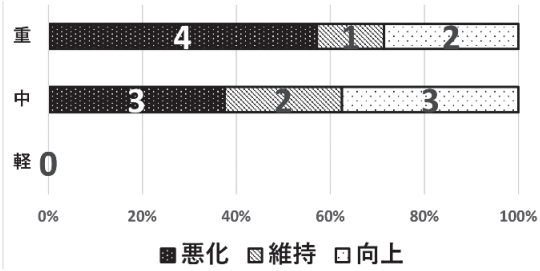
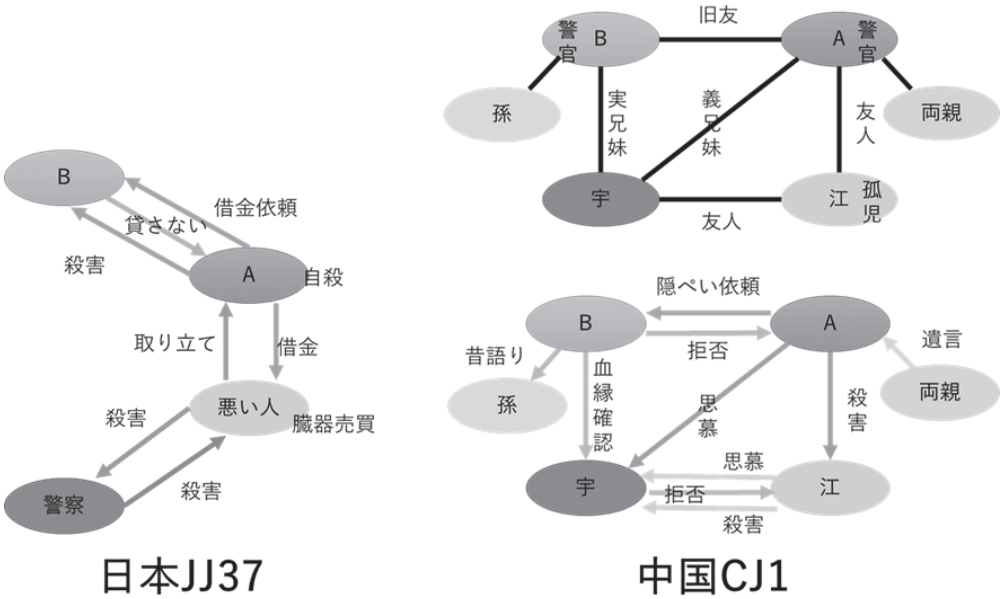


図９　物語の「人物相関図」



関図」のように図示してみる（図 9）。

CJ1 は非常に複雑な展開を示しており，一つの図ではその内容を書き表しきれず，各人物の立場とお互いの関係を表す図と，それぞれの人物の間のやりとり内容に分けて表示した。一見してわかるように，複数の人物間の関係が複雑に絡み合っている。さらにこの図にも表しきれない要素として CJ1 の物語展開は複数の過去・事件の現在・未来（事件を回想している時点）を行き来する形で時間軸上も複雑な構成になっている。

それに対して JJ37 は登場人物間の関係は比較的シンプルで，二者関係のつながり以上のことは表現されておらず，またこの図には直接表現されていないが物語の時間的展開もシンプルに順向的である。

ここに表示したのは典型例であるが，それぞれの集団内で「最も複雑な展開」を示すものを比較しても，このようなわかり易い構造の差が見いだされる。

3．結果の考察

以上の比較的素朴な量的比較と，典型例についての物語構造の比較から，今回調査に協力してくれた日中のある学校の中学 2 年生が「友人間の葛藤場面」として想定するものや，その帰結のイメージに集団間で明確な分布の偏りが見られ，そこにかなり大きな文化差と言えるも

のがあることが見えてきた。

ではその差は一体どういう意味を持っていると考えられるだろうか。ここではその差の解釈を異なる文化背景を持つ日中韓の研究者間で検討してみたい。そこで次のような文化背景を持つそれぞれの著者がこの結果からどんな意味を読み取るかを素朴に重ね合わせる，という形で考察を進める。

第一に中国東北部で朝鮮族中国人として生まれ育ち，大学以降北京で漢民族の中で暮らし，日本で 3 年半以上の留学及び研究歴を持つ教育学者姜英敏から二点の論点を提起し，それをめぐって第二に韓国済州島出身で大学院から日本で学び, 日本在住 30 年になる心理学者呉宣児, 第三に日本生まれで日本の主に本州の数か所で育ち，中国に研究関連で計 1 年余りの滞在歴を持つ心理学者山本がそれぞれの解釈を述べる。

なお前提として，今回調査協力をしてくれた日中の中学は共にいわゆる「受験校」に属し，学力面で大きな差があるとは考えられず，したがって上に示された物語の特徴の差が国語力等の差に大きく依存するといったことは考えにくい。

1）姜の解釈

①深刻度の差を生む要因

それぞれの中学生が描く葛藤について，その葛藤が生まれる前提には「友人だからこれくらい頼めるのではないか」という相手への期待が存在しており，それがあるからこそ依頼し，その期待が拒まれることで葛藤が起こる。従って日中の物語に現れた差は,「友人に期待できる援助内容」についての認識の差として見ることができる。

この観点から見れば，中国の生徒の物語により深刻な展開が見られるのは，日本の物語に多く見られるような,「通常の生活でもみられがちな援助要請」の内容については，そもそもその程度のことを拒絶することは一般に「心が偏狭である」とみなされるので，通常はそれで断られる事態は想像しにくく，より深刻な援助要請を想定した可能性が考えられる。

②葛藤解決法に見られる文化差

発生した葛藤の解決の仕方については，日本の生徒はまず自分より相手の立場を理解し，拒否の理由を納得しようとする努力を自分自身の内部で行い，葛藤を消化しようとする傾向が強いのに対し，中国の生徒は葛藤する友人と直接にぶつかり合って問題を解消しようとする傾向が強いという印象がある。

③道徳教育の文化差との関連性

これは以前日中の道徳教育の現場を観察研究したときに見いだされた，両国の道徳教育で重視される価値基準の差にも対応するように思われる。すなわち，日本の道徳授業では葛藤を生む対人関係について，他者との「気持ち」の共有が重視され，教師と生徒がともに相手の「気持ちの察し方」を考え，確認していくという展開が目立つ。その前提には「他人の気持ちを考えるべき」という規範があり「お互いの気持ちは分かり合える」という認識がそれを支えている構造が見られる。

これに対して中国の道徳教育現場では「道理」の共有が重視され，葛藤情況についてどこに是非があるのかという道理を明確化していく過程が重視されている。すなわち「その行為は道理に合うべき」という規範があり「道理は共有しあえる」という認識がそれを支えていると考えられる。

2）呉の解釈

①葛藤理解の感覚的な差異

韓国と比較したとき，日本では「素朴な感覚, 素朴で意味あるもの・こと」を大事にし，大きな物語より「素朴で具体的で自分の身近な日常的感覚のリアリティ」を重視する雰囲気がある

と感じられる。これに対して韓国では素朴なものより「大きいこと・もの，素晴らしいこと・もの，理論的で大きな物語」をより好む感覚があるように感じられるが，今回の中国の物語もその点では韓国の感覚に近いように思われる。

②葛藤への対処法の基本姿勢の違い

葛藤後の関係の変化の違いについては，日韓共に関係が壊れることは望まず，平和に維持できたほうがよいと考える点で違いはないものの，自分の経験上日本は関係の破綻状況を表に出そうとしないことを重視する傾向が強く感じられ，他方韓国はむしろ本音を出してぶつかり合うことで調整しようとする傾向が強いと感じられる。

言い換えると，多少の葛藤が起きても，白黒はっきりさせることで問題が大きくならないように，あいまいさを残してどこかで我慢している感じが日本の物語によく感じられ，韓国はその逆で，そうやって直接ぶつかり合っても友人関係はたやすく壊れるものではなく，逆にその結果関係が壊れるなら，もともとそれはしっかりとした友人関係ではなかったのだと理解する傾向が強いと思われる。

これらの印象は先行する対話的相互理解の実践（山本・伊藤 2005；伊藤・山本 2011；呉・崔・山本 2014 他）や日中韓越で行ったお小遣いに関する比較研究（呉 2016 他）にも見えた，日本の「葛藤状態をなるべく表に出さずにあいまいに関係を維持していく」傾向と韓国の「葛藤状態を隠すことなくお互いのぶつかり合いの中で関係を確かめていく」傾向の対比にも一致し，この点でも中国の物語はより韓国に近いように思える。

その点では韓中には共通性が多く，日韓・日中に違いが大きく感じられるが，ただし韓国の実際については，改めて同様の調査を行って韓中比較をより丁寧に行う必要がある。

3）山本の解釈とまとめ

文化というものの本質を考えれば，それが固定的な実体ではなく，個々人の活動の中で常に揺れ動きながら変動し続けるものである，ということは文化比較の研究で常に大前提としなければならない（山本 2013，2015）。実際たとえば宮本常一（1984）がかつて描いた日本人の姿は，「失われた日本人」という表題が示すように，少なくともその表面的な様相を見る限り，それが書かれた当時でもすでに失われつつあり，さらに今の日本でそれを見出すことはほとんど不可能と言えるくらい難しい。

同時に，その変化はそれまでに形成されてきた文化的傾向から独立に成立するものではなく，以前の傾向を新たな環境的要素に適応可能な形で再構築していく形で展開していくものであり，白いキャンパスに新しい色を塗るような過程とは全く異質である点も見過ごすことができない。

このため，たとえば花伝書その他，子育てや教育に関する数百年前の日本人の感覚に見られる特徴と，かつて初等教科書的な意味を持った三字経にもよく表される同時期の中国との差が，現在の日本と中国の対比から見えてくる差とかなり深いところで同質であることには驚かされる（山住・中江 1979：太田 1994：山本 1997：郭沫若 1947：新三字経編写委員会 1995 他）。

すなわち，文化的特徴はその社会に生きる人々が日々の生活実践の中で相互に了解可能な形でコミュニケートし，前世代と共に生き続けなければならないという制約下にあり，例えば中国では社会の「現代化」に伴って人治から法治への転換が繰り返し叫ばれたが，その構造自体が実は中国史の中で繰り返されてきた法家と儒家の対立の現代的焼き直し的性格を持つように，何らかの形でその具体的内容を変化させつつも，基本パターンをある程度了解可能な形で維持・継承せざるを得ない。

実際今回は論じきれず，今後大学生のデータ比較などを通して改めて論じたいポイントであるが，中国の物語の中の葛藤にはまさに法家と儒家の思想的対立と同質の葛藤が繰り返し見いだされており，日本の中学生が描く葛藤の構造との強い対比を見せている。そのように，異なる文化的背景を持つ人々の間のコミュニケーションの質は，時代と共にそれぞれが変化しつつも，その人が旧来の生活の場や人間関係から完全に切り離されて再構成されない限りは，両者のコミュニケーションは決して同質のものとはなりえないと想像される。

山本が中国に長期滞在し，そのコミュニケーションの文化的特徴を体験し，その基本特徴に関するイメージを形成したのはすでに四半世紀も以前のことであり，その間に中国社会は劇的に変化し，子どもに対する教育の在り方も当時とは全く異なっている。にもかかわらず今回のデータから見いだされた中学生の物語の特質は，企業間の争いがテーマとして設定されるなどの点で，以前の中国では想像もできないほどに異質と言える変化がありつつ，そこで展開する対人関係の在り方については，四半世紀前に山本が感じ取った日本との差異とほとんど変わらず，むしろ「なつかしさ」を感じさせ，その意味で過去に形成した中国人像と「違和感」がないことに驚かされる。

その違いはなんであるのか，ということについて，姜と呉は表現こそ異なるが，内容的にはほぼ同質のことを指摘しているように山本には思える。すなわち，日本の中学生は葛藤状態の顕在化をできるだけ避けようとし，お互いに傷つかないよう相手と距離を取りつつ，相手の心情を忖度する形で自分を納得させて関係を維持しようとする傾向が見え，逆に中国は強い葛藤状態の顕在化と対立点の相手への明示，それを前提にしたやりとりの展開の中で関係が破綻したり，逆に「雨降って地固まる」になったりと両極化する傾向が見えることである。

日本的感覚からすると中国の物語が非常に劇的な展開を示し，内容も深刻に感じられるのは，そのような「葛藤状態の物語化」の基本傾向の差が原因となっていると考えられよう。

ただし，文化比較を行う際に，二つの集団を比較してそれぞれの特徴を論ずる場合，どうしても二項対立的にその性質の差を際立たせるための単純化・極端化が生じる。文化間に生ずる葛藤を対話的に調整するには，お互いの間に気づかずに存在して様々な誤解を生み，厳しい対立関係を生むディスコミュニケーション状況（山本・高木 2011）に敏感となる必要があると共に，その差異の理解そのものに柔軟な視点が必要となる。

そのためには今後韓国のデータを採って分析するといった新たな比較軸を設けて同じ問題を検討することが必要となるだろう。それによって，それぞれの文化に優勢な葛藤の理解の特質や意味はより豊かに見えてくると考えられる。いわゆるトライアンギュレーションの論理であるが，次の課題としたい。

引用文献

（便宜のため中国名は日本語ローマ字読みで配列）
伊藤哲司・山本登志哉（編）（2011）日韓傷ついた関係の修復――円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界 2。北大路書房。
姜英敏・王燕玲・草野友子（2009）“お返し”をめぐる日中共同授業――価値基準の異なる他者理解の試み。国際理解教育。15，76-86.
郭沫若（1947）少年時代。上海海燕書店。
釜田聡・姜英敏（2014）日本・中国『異己』理解共同授業プロジェクトの概要。国際理解教育，20，96-100.
釜田聡・堀之内優樹・周勝男（2020）「異己」理解共生を目指した国際教育のプログラム開発。上越教育大学教職大学院研究紀要，7，81-94.
國分功一郎（2017）中動態の世界――意志と責任の考古学。医学書院。
國分功一郎・熊谷晋一郎（2020）〈責任〉の生成――中動態と当事者研究。新曜社。
宮本常一（1984）忘れられた日本人。岩波文庫

呉宣児（2016）文化差が立ち現れる時・それを乗り越える時．高橋登・山本登志哉（編），子どもとお金――おこづかいの文化発達心理学（pp. 213-240）。東京大学出版会。

Oh, S.（2017）Dialogical exchange class using movies for mutual understanding between a Korean and a Japanese university. Integrative Psychological and Behavioral Science, 51（3）, 379-390.

呉宣児・崔順子・山本登志哉（2014）．集団間異文化理解への試み（1）――日本と韓国の大学をつなぐ円卓シネマを通して。共愛学園前橋国際大学論集。14。127-143.

太田素子（1994）江戸の親子。中公新書。

片成男（2002）援助規範逸脱をめぐる相互作用から見る道徳性とその発達――日中比較研究。神戸大学大学院博士論文。

Pian, C.（2017）What happened in dialogical classes of intercultural understanding?: An analysis of exchanging classes between Chinese and Japanese university students. IntegrativePsychological and Behavioral Science, 51（3）, 391-402.

新三字経編写委員会（1995）新三字経。広東教育出版社。

Tajima, A.（2017）"Dialogic vaccine" to bridge opposing cultural viewpoints: Using Bakhtin's views on dialogue and estrangement. Integrative Psychological and Behavioral Science, 51（3）, 419-431.

Tajima, A.（2021）A sustainable consciousness promoting dialogue with alien others: Bakhtin's views on laughter and Euripides' tragi-comedy. International Review of Theoretical Psychologies, 1, 225-242.

Takahashi, N., Yamamoto, T., Takeo, K., Oh, S. A., Pian, C., & Sato, T.（2016）.East Asian children and money as a cultural tool: Dialectically understanding different cultures. Japanese Psychological Research, 58, 14-27.

Takahashi, N., & Yamamoto, T.（eds.）（2020）Children and money: Cultural developmental psychology of pocket money. Charlotte NC.: IAP.

Watanabe, T.（2017）The story-presenting method: A method for constructing multiple viewpoints to understand different cultures. Integrative Psychological and Behavioral Science, 51（3）, 403-418.

渡辺忠温（2021）逆 SST の可能性――新しい支援のための対話的当事者理解の試み。（企画・話題提供：渡辺忠温，話題提供：大内雅登）日本教育心理学会第 63 回総会発表論文集，JF03.

渡辺忠温・大内雅登（2021）当事者理解と共生的関係づくりに向けた逆 SST という方法。SST 普及協会第 25 回学術集会 in 山口プログラム抄録集，51.

山本登志哉（1997）子育ち的子育て論の系譜――野村庄吾著『笑吾先生子育ちばなし』を論ず。花園大学社会福祉学部研究紀要。5．93-98.

山本登志哉（2013）文化の本質的な曖昧さと実体性について――差の文化心理学の視点から文化を規定する。質的心理学研究，12，44-66.

山本登志哉（2015）文化とは何か，どこにあるのか――対立と共生をめぐる心理学。新曜社。

山本登志哉（2016）お小遣い研究と差の文化心理学。高橋登・山本登志哉（編），子どもとお金――お小遣いの文化発達心理学，東京大学出版会。

Yamamoto, T., & Takahashi, N.（2007）Money as a cultural tool mediating personal relationships: Child development of exchange and possession. In Valsiner, J., & Rosa, A.（eds.）The Cambridge handbook of sociocultural psychology（pp. 508-523）. New York: Cambridge University Press.

山本登志哉・石塚章夫（2019）供述評価をめぐる心理学者と裁判官のディスコミュニケーション――何が，何故ずれるのか。判例時報。2396．125-134.

山本登志哉・伊藤哲司（編）（2005）アジア映画をアジアの人々と愉しむ――円卓シネマが紡ぎだす新しい対話の世界。北大路書房。

山本登志哉・姜英敏（2011）ズレの展開としての文化間対話。山本登志哉・高木光太郎（編）ディスコミュニケーションの心理学――ズレを生きる私たち。pp. 17-48．東京大学出版会。

山本登志哉・高木光太郎（編）（2011）ディスコミュニケーションの心理学――ズレを生きる私たち。東京大学出版会。

山住正巳・中江和恵（1996）子育ての書 2。平凡社東洋文庫。

A Comparative Study of Japanese and Chinese Junior High School Students on the Cultural Characteristics of Conflict among Friends

Yamamoto TOSHIYA
(Developmental Research Support)
Jiang YINGMIN
(Beijing Normal University)
Oh SUNAH
(Kyoai Gakuen University)

In this study, we asked second-graders of Japanese and Chinese junior high schools to freely create a story in which they asked a friend for a favor but were refused, and analyzed the contents of the conflict shown in the story, how they dealt with it, and the changes in the relationship between the two afterwards. In this study, quantitative analysis of the stories and qualitative comparison of the differences in structure found in the typical cases were conducted, and it became clear that, compared to Japan, Chinese eighth graders tended to create stories that portrayed serious conflicts, had complex background contexts such as the relationships between the characters, and were dramatic in their development. Based on the above results, the authors from different cultural backgrounds in Japan, China, and Korea attempted to interpret what kind of cultural meanings could decipher from these stories.

Key Words：Junior high school student, friend, conflict, story, Japan-China cultural comparison